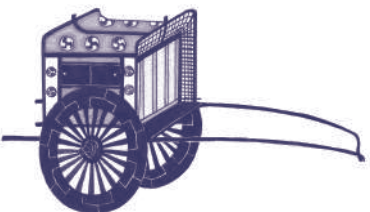


なりきり訳 枕草子



第一段	春っていえば…… 「春は、曙」	14
第二段	お気に入りの季節 「頃は、正月」	15
第三段	お正月のこと 「正月一日は」	15
第五段	賀茂の祭り 「四月、祭の頃いとをかし」	19
第七段	僧侶って大変よね 「思はむ子を法師に」	21
第二四段	女の生き方 「生ひ先なく、まめやかに」	22
第二五段	がっかり、残念なもの 「すさまじきもの」	23
第二八段	憎たらしいもの 「にくきもの」	29
第二九段	ドキドキする状況 「心ときめきするもの」	34
第三一段	気持ちのスカツとするもの 「心ゆくもの」	34
第三二段	高級車と大衆車 「檳榔毛はのどかにやりたる」	35
第三三段	説教会の常連 「説経の講師は顔よき」	36
第四二段	上品で美しいもの 「あてなるもの」	39
第五六段	宮中の「名対面」 「殿上の名対面こそ」	40
第五八段	ぼっちやいなほうがいい 「若き人、ちこどもなどは」	41
第六三段	男女は別れ際こそ大切 「あかつきに帰らむ人は」	42



第六七段	草の花といったら 「草の花は」	43
第七三段	逢瀬は夏がいい 「しのびたる所にありては」	45
第七四段	召使いの選び方 「懸想人にて来たるは」	46
第七五段	滅多に存在しないもの 「ありがたきもの」	47
第七九段	どうしようもないもの① 「あぢきなきもの」	48
第八一段	年の暮れの「御仏名」 「御仏名のまたの日」	49
第八二段	誤解 「頭の中將の、すずろなるそら言を聞きて」	50
第八七段	中宮さまのいけず 「職の御曹司におはします頃」	58
第八八段	素晴らしいもの 「めでたきもの」	77
第八九段	優美なもの 「なまめかしきもの」	80
第九五段	「やっちゃった!」ってこと 「ねたきもの」	81
第九六段	いたたまれなくなるもの 「かたはらいたきもの」	84
第九七段	あくあ、と思うもの 「あさましきもの」	85
第九九段	ホトトギスの声を聞きに 「五月の御精進の程」	86
第一〇〇段	秋の月の心 「職におはします頃」	100
第一〇一段	一番大切な人 「御方々、君達、上人など」	101
第一〇二段	珍しい扇の骨 「中納言まゐり給ひて」	103
第一〇三段	信経との言い争い 「雨のうちはへ降る頃」	104
第一〇五段	梅の謎かけ 「殿上より、梅のみな散りたる枝を」	107



第一〇六段	花びらのような雪	「二月つこもり頃に」	108
第一〇七段	前途遠くに思えるもの	「行く末はるかなるもの」	109
第一〇九段	見苦しいもの	「見苦しきもの」	110
第一一四段	淀の渡り	「卯月のつこもりがたに」	111
第一一六段	本物より絵が劣るもの	「絵にかきおとりするもの」	111
第一一七段	本物より絵がいいもの	「かきまさりするもの」	112
第一二一段	気に食わないもの	「いみじう心づきなきもの」	112
第一二四段	男って油断ならないわよね	「はづかしきもの」	113
第一二五段	カッコ悪いもの	「むとくなるもの」	115
第一二七段	あ、ヤバイって思うもの	「はしたなきもの」	116
第一二九段	関白さまの権勢	「関白殿、黒戸より」	117
第一三〇段	九月っていいわ	「九月ばかり、夜一夜」	119
第一三三三段	行成さまと「へいたん」	「頭の弁の御もとより」	120
第一三五段	恋人にならない理由	「故殿の御ために」	123
第一三六段	逢坂の関	「頭の弁の、職に参り給ひて」	126
第一三七段	呉竹の別名	「五月ばかり、月もなういと暗きに」	130
第一三八段	差出人不明の手紙	「田融院の御はての年」	133
第一三九段	手持ち無沙汰なもの	「つれづれなるもの」	138
第一四〇段	退屈しのぎになること	「つれづれなぐさむもの」	138
第一四一段	どうしようもないもの②	「とり所なきもの」	138
第一四二段	石清水の臨時祭	「なほめでたきこと」	139
第一四三段	政変のさなかで	「殿などのおはしまさで後」	144
第一四四段	桃の枝をねだる子どもたち	「正月十よ日の程」	151
第一四五段	双六とイケメン	「きよげなる男の」	153
第一四七段	恐ろしげに見えるもの	「恐ろしげなるもの」	153
一本に三段	聞きたくないもの	「聞きにくきもの」	154
一本に二三段	物の怪払い	「松の木立高き所の」	154
一本に二八段	下品な連中	「はせにもうでて」	157
一本に二九段	牛飼童の教育	「女房の参りまかでは」	158
第一四九段	品のないもの	「いやしげなるもの」	159
第一五〇段	胸がドキンとするもの	「胸つぶるもの」	159
第一五一段	可愛らしいもの	「うつくしきもの」	160
第一五二段	調子に乗るもの	「人ばへするもの」	162
第一五五段	むさくるしいもの	「むつかしげなるもの」	163
第一五六段	たまに活躍するだけで	「えせものの所得る折」	163
第一五七段	ツライ立場の人	「苦しげなるもの」	164
第一五八段	羨ましいもの	「うらやましげなるもの」	165
第一六〇段	じれったいもの	「心もとなきもの」	168

第一〇六段	花びらのような雪	「二月つこもり頃に」	108
第一〇七段	前途遠くに思えるもの	「行く末はるかなるもの」	109
第一〇九段	見苦しいもの	「見苦しきもの」	110
第一一四段	淀の渡り	「卯月のつこもりがたに」	111
第一一六段	本物より絵が劣るもの	「絵にかきおとりするもの」	111
第一一七段	本物より絵がいいもの	「かきまさりするもの」	112
第一二一段	気に食わないもの	「いみじう心づきなきもの」	112
第一二四段	男って油断ならないわよね	「はづかしきもの」	113
第一二五段	カッコ悪いもの	「むとくなるもの」	115
第一二七段	あ、ヤバイって思うもの	「はしたなきもの」	116
第一二九段	関白さまの権勢	「関白殿、黒戸より」	117
第一三〇段	九月っていいわ	「九月ばかり、夜一夜」	119
第一三三三段	行成さまと「へいたん」	「頭の弁の御もとより」	120
第一三五段	恋人にならない理由	「故殿の御ために」	123
第一三六段	逢坂の関	「頭の弁の、職に参り給ひて」	126
第一三七段	呉竹の別名	「五月ばかり、月もなういと暗きに」	130
第一三八段	差出人不明の手紙	「田融院の御はての年」	133
第一三九段	手持ち無沙汰なもの	「つれづれなるもの」	138
第一四〇段	退屈しのぎになること	「つれづれなぐさむもの」	138



第一六二段	四月の詩と七月の詩	「故殿の御服の頃」	170
第一六六段	近いようで遠いもの	「近うて遠きもの」	181
第一六七段	遠いようで近いもの	「遠くて近きもの」	181
第一七七段	マイホームを持つ幸せ	「六位の藏人などは」	181
第一八一一段	雪夜の楽しみ	「雪のいと高うはあらで」	183
第一八二一段	火鉢の煙はどこから?	「村上の先帝の御時に」	184
第一八四一段	清少納言のウブな頃	「宮にはじめて参りたるころ」	186
第一八六一段	出世はいいものね	「位こそなほめでたき物はあれ」	196
第一九五一段	言葉づかいて大事	「ふと心劣りとかするものは」	198
第一九六一段	デートで食事はNG	「宮仕人のもとに来などする男の」	199
第二〇〇一段	台風の翌日	「野分のまたの日こそ」	200
第二一五一段	楽しい遊び	「遊びわざは」	201
第二一八一段	笛なら横笛	「笛は横笛」	202
第二二二一段	賀茂祭の復路	「祭のかへさ、いとをかし」	203
第二二三一段	五月の山里	「五月ばかりなどに山里にありく」	206
第二三三一段	月夜の水面	「月のいと明きに」	207
第二三四一段	短いほうがいいもの	「短くてありぬべきもの」	207
第二三七一段	お祭りの日くらい	「よろづのことよりも」	208
第二四〇一段	中宮さまの饞別	「御乳母の大輔の命婦」	210



第二五九一段	小ざかしいもの	「さかしくもの」	211
第二六二一段	手紙の書き方	「文ことばなめき人こそ」	212
第二六六一段	サイテーな婿	「いみじうしたてて婿とりたるに」	214
第二六七一段	人生最高の喜び	「世の中になほいと心うきものは」	216
第二六八一段	男って理解不能だわ	「男こそ、なほいとありがたく」	216
第二六九一段	思いやりのある人	「よろづのことよりも情けあるこそ」	218
第二七〇一段	噂話はやめられない	「人のうへいふを」	219
第二七六一段	嬉しいもの	「うれしきもの」	219
第二七七一段	ストレス解消法	「御前にて人々とも、また」	222
第二九九一段	香炉峰の雪	「雪のいと高う降りたるを」	227
第三〇六一段	船の旅はご用心	「日のいとうららかなるに」	228
第三〇八一段	藤原道綱母の噂	「小原の殿の御母上とこそは」	231
第三〇九一段	在原業平の母の噂	「また、業平の中将のもとに」	231
第三一三一段	教養ある大納言さま	「大納言殿参り給ひて」	232
第三一五一段	もの寂くそうな人	「男は、女親亡くなりて」	235
第三一九一段	あとがき代わりに	「この草子、目に見え心に思ふことを」	236

(跋文)

平安時代の暮らし解説

四季の風情	14
若菜摘み	15
白馬節会	16
小豆粥	17
申文	18
二藍	19
蔵人の青色	20
修験者	21
清少納言のキャリア	22
方違え	23
手紙(立て文と結び文)	24
乳母	25
護法童子	26
前司・権官・員外	27
葉玉	28
式部大夫	30
弓技大会「騎射」	88
高階明順	89
懸盤と折敷	90
冠と烏帽子	92
卯の花とホトトギス	94
雷鳴の陣	95
平安時代の山菜	96
歌人の家系・清原氏	97
庚申	98
藤原伊周	99
中秋の名月	100
白居易	101
一乗の法、九品蓮台	102
藤原隆家	103
刀伊の入寇と隆家	104
作物所	106
梅と桜	107
藤原公任	108
生地の「ひねり」	109
カツラ愛用者	110
菖蒲の根合わせ	111
牛車の乗り方	112

伊予簾	31
牛車のメンテナンス	32
平安時代の鳥飼育	33
牛車	34
平安時代のイケメン	36
六位蔵人	37
削り氷	38
イチゴ	39
滝口の武士と鳴弦	40
指貫	42
烏帽子の紐	43
平安時代のススキ	44
下部たち	46
御仏名	48
琵琶	49
物忌	50
平安貴族と漢詩	52
藤原斉信	54
頭の中將	55
清少納言の結婚	56
職の御曹司	58
定子の隠棲と出産	60

夜居の僧	113
平安時代の結婚	114
寝具	116
下襲の裾	117
藤原道隆	118
道長と清少納言	119
平安時代の中華料理	120
肉食文化	122
関白道隆の死	123
平安時代の恋愛	124
孟嘗君の故事	126
藤原行成	127
源経房と『枕草子』	129
清涼殿の呉竹と河竹	130
呉竹Ⅱ「この君」の由来	131
喪服	132
忌色	134
二階厨子・二階棚	136
台盤所	137
囲碁	138
掃部司と畳	139
舞楽	140

平安時代の雪	62
主殿司	63
白山	64
帝のお使い	65
雪あそび	66
柚子の葉色	68
卯槌	69
定子の内裏復帰	70
女官と女房	71
平安の敷物	72
大内裏	74
飾り太刀	76
蘇甘栗使	77
闕腋と縫腋	78
汗衫	80
三重の檜扇	81
朽木形	82
女房名のつけ方	83
平安時代の飲酒	84
挿し櫛	85
御精進	86
筵道	87

石清水臨時祭	142
長徳の変	144
清少納言の微妙な立場	147
その後の定子	148
なぞなぞ合わせ	149
たとえ話の意味	151
毬打	152
双六	153
お齒黒	154
祈禱の方法	155
物の怪	156
長谷寺	157
牛飼童	158
笏	159
恐ろしい伝染病	160
平安の水菓子、瓜	161
正月の齒固	162
ひめまうち君	163
菓子	164
五節の舞姫	165
伏見稻荷	166
難波わたり	167

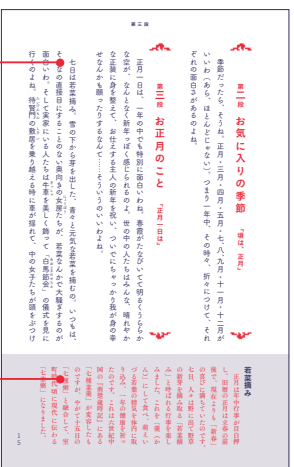
平安時代の雪	62
主殿司	63
白山	64
帝のお使い	65
雪あそび	66
柚子の葉色	68
卯槌	69
定子の内裏復帰	70
女官と女房	71
平安の敷物	72
大内裏	74
飾り太刀	76
蘇甘栗使	77
闕腋と縫腋	78
汗衫	80
三重の檜扇	81
朽木形	82
女房名のつけ方	83
平安時代の飲酒	84
挿し櫛	85
御精進	86
筵道	87

羨ましい女官……………168
 命がけの出産……………169
 平安時代の時報……………171
 唐風の太政官……………172
 人間の四月……………173
 七夕……………174
 参議は重役級……………175
 源中将・宣方……………176
 斉信の参議昇進……………178
 朱買臣……………180
 遠くて近い極楽……………181
 受領はもうかる……………182
 平安時代の不動産……………183
 平兼盛の和歌……………184
 村上天皇の御代……………185
 高坏の明かり……………187
 葛城の神……………188
 冠直衣……………190
 几帳……………192
 関白……………194
 色紙……………196
 名目上の乳母……………197

僧侶の階級……………199
 文字の読みと発音……………200
 湯漬け・水飯……………201
 薄物の小桂、生絹の単……………201
 蹴鞠……………202
 管楽器……………203
 賀茂祭の葵……………204
 牛車の車副……………206
 内侍への嫉妬……………207
 蓬の香り……………208
 棧敷席……………209
 賀茂斎王……………210
 陰陽師は科学者……………212
 一人称「まろ」……………213
 秘密にした諱……………214
 婿の扱い……………215
 平安時代の美人……………216
 書の名人……………218
 物語と文学少女……………220
 紙の種類……………221
 生地の打ち加工……………222
 畳の種類……………223

姥捨て山……………224
 綾織……………225
 御座……………226
 御簾……………227
 平安時代の旅(海路)……………229
 平安時代の旅(陸路)……………231
 在原業平……………232
 宿直……………233
 和漢朗詠集の「鶏人」……………234
 漢詩に優れた母……………235
 継母との関係……………236
 『枕草子』の命名由来……………237
 『枕草子』の伝来……………238

＊本書は『枕草子』の写本のうち、
 宮内庁書陵部所蔵「三巻本」を底本とし、
 著者独自の解釈で現代語訳したものです。
 本文中の（ ）内は、原文にはない
 清少納言の心の叫びです。



上段…清少納言に
 なりきった
 現代語訳

下段…平安時代の
 暮らし解説